

毎日新聞2月13日付け朝刊は、日本経団連の奥田碩会長が、BSEの影響で牛井の吉野家に客が「食べおさめ」の行列をつくったことについて、12日の記者会見で「牛井がなくても」死ぬわけでない。日本人は右から左へ早くふれやすい、単純な国民だと感じた」と、牛井フィーバーを皮肉ったと報じている。

筆者も同感だが、少し違った感想も持った。むしろこういう「事件」が起きる度にここぞとばかりにはしゃぎ回るTVや新聞の在り様に、「煽るなよ。日本人はもう少し成熟した国民になっているのではないかい。記者さんよ、もっと伝えなければならんことがあるだろーが」と毒つきたくなるのだ。

そもそも、数年前にイギリスの農場で写されたホルスタイン種の牛がよろけ、のた打ち回るおどろおどろしい映像を繰り返し流し、人々の恐怖心を煽ってきたメディア、日本でのBSE発生から行政の対応の悪さを批判していたメディア、全頭検査という安心ではあるが極めて大きなコストを要し本当にそれが科学的と言えるかどうかには疑問の残る検査システムを手放しで礼賛したメディア、さらに、ついこの前

稲の刺江

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。全く管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

本誌編集長 昆吉則

までアメリカで見つかったBSE感染牛発見について大騒ぎをしたメディア。その舌の根が乾かぬうちに、これまで騒ぎ立ててきた食の安全や技術批判はすっかり忘れてしまったかののごとくの、「ザロナラ牛井フィーバー」報道。オメーらいったい何なのだ、と云いたくなるのは筆者だけではない。

18万頭もの牛のBSE感染が確認されたイギリスと数頭の日本。実際にはもっと多いことは十分に想像できるが、それにしてもイギリスのケースとBSE発生の桁は大きく違う。だから大丈夫などと言うつもりは無い。しかし、リスクの存在を指摘することはジャーナリズムの役目だとしても、18万頭で100人程度の人への感染とは、疫学

吉野家牛井フィーバーの後で

的に見てどの程度の意味を持つものなのか、それが日本の場合ではどれだけの人の感染リスクがあるのか。そんなことを牛井フィーバーを煽るメディアはどれだけ問うてきたのか。

もつとも、「ん、吉野家の牛井が食えなくなる、それなら食べておこーッ」と考えて行列をつくった人々の存在は、あれほど熱心にメディアが恐怖を煽ったにもかかわらず、人々はその報道を間に受けてはいないという証ではないか。むしろそこに人々の現実感覚が示されていると言うべきなのかもしれない。

本当に単純なのは国民ではなくメディアなのだ。メディアというものがその時代や社会や国民の知的レベルや関心を表現しているのは事実である。でも、すでにメディアの編集者たちが思っているより日本人は成熟した国民になっっているのだ。

むしろ、彼らの姿は「売れない。何を売ったらよいのだ」とただの安売り

に走っている他の業界人に似て、何を伝えればよいのかを見失い人々に捨てられようとしている存在のようではないか。レベルの低い視聴率獲得・販売競争ゆえに、世の中で起きる現象や事件の表層だけを話題性においてのみ追いかけるTVや新聞には、むしろそれが視聴者や読者を白けさせていると考える想像力はないのだろう。

事件にかかわった企業や風評被害にあっている生産者の商品を棚からは外すだけで自分の責任を回避する姑息な小売業と同様に、話題になることだけをとり上げ、話題にすべきことが何かを考えないメディアとしたら、それはテレビ屋や新聞屋であつてもジャーナリズムの名には値しないだろう。そんな連中に限って風向きを見ながら正義面をして登場してくるのだから、さらに始末が悪い。

もつとも、米国でのBSE、鳥インフルエンザ、吉野家フィーバー等が起きた後に、そろそろ自らの愚かしさに気付いたメディアが、農業問題を含めて食の安全や人々の安心と言う問題についても少しは冷静に語り始めるのではないかと、密かに筆者は期待している。